
きかんしゃズーマス

上総 翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

きかんしゃズーマス

【ZPDF】

N7253D

【作者名】

上総 翼

【あらすじ】

電車で寝過ごし、終点の駅にたどりついた青年が、そこで見たものとは・・・。

俺は、俗に言つサラリーマンだ。

オフィスは、都心にある。家族は、まだいないけど。でも残業もある。俺は今、残業してゐるところだ。

「じゃー今田は仕事切り上げようかー。」

いつも言つたのは、俺の課の課長だった。

課長の一言で、同僚たちは自席から立ち上がり、帰つていった。もちろん、俺も帰るのだが。

特に用もないで、駅に直行して、電車に乗ることにする。

ホームの列の先頭に立ち、俺は見事、座席を獲得することに成功した。

通勤ラッシュの中、座席に座れるなんて最高の贅沢だと今の俺は思つ。

気付くと、俺はとんでもない所に着いていた。

電車の座席に座つて、でも、だんだん眠くなつてきて・・・。

俺はそこまでしか覚えていない。

とりあえず、ここが電車の終点みたいだ。帰りの電車を探すか。

そう思つて俺は時刻表を見てみる。

あれ、もう電車ないじやん、ちょっとふざけんなよー。ここで夜を明かせつて言つのか。

とりあえず俺は駅から出てみる。

夜だから景色は見えない。でも大体、どんな所はわかつた。なんだよここ、寂しい所だなー、てかコンビニないじやん。たぶんホテルとかもないな。

あきらめて、俺は駅のホームのベンチに腰掛ける。

」の駅、駅員とかいないのかよ。てか運転手はどこに行つたんだよー。電車は側線に入つてるし。

まじで、始発まで待つのかよー。ベンチで寝ろつて叫ぶのか。

その時、俺は遠くで踏み切りが鳴るのを聞いた。

あれ終電はいつたはずだろ。いつたいなんだよ。

しばらくすると駅の田の前の踏み切りも鳴り始めた。

なつなんだって言つだよ。俺、幽霊とか苦手なのになー。

しばらくすると、しゃつしゃつと音を立てながら汽車が駅に近づいてきた。

つか、あれって汽車か？

良く見ると、汽車に手足がついてるし。

つて、顔あるし、しゃつしゃつて口で言つてるよ。

なんなんだよあれー。

そういう思つてゐるうちに、その汽車（なのか？）は駅のホームに停車（と言えるのか？）した。

その汽車らしきものは、全体が青い車体で、数字の”1”と”2”AS”的文字が書かれてゐる。それに後ろには、ロケットの噴射口みたいなものがついてる。

俺は、好奇心から目の前にいる汽車らしきものに恐る恐る近づいてみる。

「なんだ、お前。」

とても低い声が、俺の耳に入った。

俺は、動けなくなつた。恐怖が、俺の体を支配した。

「お前だよ、お前。こんな時間になんでホームにいるんだい？」

ホームにいるつて、俺しかいないよな。明らかに俺に對して言つてるよな。

俺は、声のした方向に、目を向けてみた。俺は啞然とした。

「そり、お前のことだよ。もしかして、あれか、終電に乗り遅れた口か。」

顔のついた汽車がしゃべってるよ。なんなんだよこいつ、俺に話しつけてくるのか?まさか、妖怪?だったら何をされるかわかつたもんじゃない。でも話せるんだつたら交渉の余地もあるよな。できる限りやってみるか。

「そりですけど、あつあなたは一体何物なんですか。」

恐怖心から、思わず敬語を使つていた。

「俺の名は、機関車ズーマス。」

ズッズーマス?なんだそれ、その名前どこかで聞いたことがある。

「どつこから来たんですか。」

「ズーマスランドだ。この近くの遊園地の地下にある。」

ズーマスランダ?まるでどこの国の遊園地みたいだな。

「で、今日はここに何をしここいらしたのでしょうか。」

「今日は、試運転でこの路線を走行している。そうだ、お前、どうせ帰る手段ないだろ。だったら俺に乗つてかないか。運賃は298円でいいぜ。で、お前の家はどこだ?」

「「」国分寺です。ヒツ東京の。」

やばい、俺、完全にあつちのペースに乗せられてるよー。でも、乗せてやるつて・・・まさかあの椅子の上かよ。明らかに上にただ置いてあるだけじゃん。

「国分寺か、お安いじ用だぜ。俺の最高速度は時速7000キロだからな。40秒で着くぜ。」

この汽車つて足で走るんだろ、そんな速度出せるはず・・あるかもしれない。

あの後ろのついてたロケットの噴射口みたいなもの、まさか。しかし、こんな吹きさらしの席で時速7000キロは危険すぎるだろ。でも40秒で着くのかー。あー駄目だ駄目だリスクが高すぎる。だから298円なんだー。

「どうする、俺に乗るのか、乗らないのか。どうちだ。」

すごい剣幕で俺に聞いてきた。

どうしようかなー、朝までここにいるのも嫌だしなー。かと言つてあの椅子の座るのは怖いしなー。

「そーか、上の席に座るの嫌か、わからないでもないな。でも席はこれだけじゃないぜ。」

「」だけじゃないって、他の何処に席があるんだよ。

「その席とは一体何処のことじょつか。」

「煙突の中だ。」

何言つてんだこいつ。煙突の中が座席、つてふざけんじゃねーよ。でも、こじこじできれても何されるかわからないからな。少し探しを入れてみようか。

「煙突から煙、出でますけど、これってなんなんですか？乗つても平氣なんですか？」

「煙？あーこれか。これは雰囲氣をだすために焚いてあるだけで、こんなのなくとも走れるぜ。」

そう言つと、ズーマスは煙を消してみせた。

まあ、これなら乗れないこともないか。でも、本当に国分寺までいつてくれるのだろうか？本当にあの世に行きだつたりするかもしれない。

「乗るなら早く乗れよ。もうすぐここ出発しないといけねーんだよ。」

面白い、乗つてやるか。俺は煙突の中の席？に座つた。

「じゃーいへザ。お密さん。しつかりつかまつてな。」

ロケットの発射する時のような爆発音とともにズーマスは出発した。あまりの衝撃に、俺はその瞬間、意識を失つた。最後に「ローン」と音が聞こえたような気がした。

、 昨夜から、 東京都の国分寺市から山梨県の河口湖町にかけての一帯が壊滅状態に陥っています。 原因は今だ、 わかつておりませんが、 調べによりますと、 隕石みたいなものが落下したと言ひ目撃証言もでており、 現在も調べをすすめています。

荻原のやつ、 今日会社に来れないかもしれないなー。 だつてあいつの家、 国分寺だろ。

課長はテレビを見ながらそう思つた。

、 今入ってきたニュースです、 わきほじ東京駅の駅長あてに、 齋迫文めいた文書送られてきたことが明らかになりました。
なんだなんだ、 テロでもやるつとしてるのか、 こいつから近いし、 やられちゃ仕事ができなくなる。

荻原のことなど一氣吹つ飛んだ。

課長は食い入る様の画面を見ていた。

、 この文章には、 今日、 12時丁度、 東京駅16番ホームに、 機関車ズーマスなるものを入線させるのでホームを空けといてほしいと言つ内容が書いてありました。 JR東海は警察に連絡するとともに安全のため東京駅の新幹線ホームをあけて置くことを決定しました。 警察も、 悪戯、 テロの両面で対策をすすめていくとの事です。

今回の出演は、

俺こと荻原啓一。

課長こと小野寺明人。

そして、

ズーマス

でした。

(後書き)

自分なりにホラーを書いたつもりですが、読んでもあまり怖くはないと思います。まだ経験不足なもので・・・皆さんの評価をお待ちしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7253d/>

きかんしゃズーマス

2010年12月10日00時13分発行